

## 【地域と共に生きる真宗寺院】

主査 波佐谷宏昭(上ノ国町・清浄寺)

私たち「地域と共に生きる真宗寺院」部会は、「今、真宗寺院が果たして、ご門徒を含めた地域社会から、本当に必要とされているのかどうか」「地域社会から信頼され、地域の人々の依り処になるようなお寺になっっているか」ということを課題として、話し合いを重ねてまいりました。

話し合いの中で、ご門徒さんとうり関わること以前の問題として、お寺に生きていくということ、お寺があるその地域で生きていくという覚悟、決心が出来ないままに、お寺に身を置いて、悶々としながら法務をしているというお話や、真宗寺院は、ご門徒さんや地域の人たちから必要とされているかということ以前に、私自身がお寺に身を置くことに喜びがない、お寺の子として生まれたという立場とか、体裁とか、経済という理由だけで、寺に身を置いていく様な気がするというお話がありました。

また、宗祖親鸞聖人は、非僧非俗とおっしゃいましたが、私たちは半僧半俗になっているということが話題となりました。その時々で、僧と俗とを使い分けている。しかし、そのような在り方は、僧として振る舞っているときも、僧分を尽くしているのではなく、ご門徒や地域社会の人の前だけ、俗の上にいる僧の仮面を付けてい



るにすぎないということなのでしょう。そういう意味では、ご門徒さんや地域社会と共に生きるという以前に、お寺に生きる、僧侶として生きていくという本當の覚悟が出来ていないという問題があるのでしょうか。

住職をはじめ、寺に住む者が、ご門徒や地域社会とどのような関係にあり、関わっているかという課題に向き合った時に見えてくるのは、住職である自分自身の「閉鎖性」です。住職がご門徒と共に語り合い、互いに念仏の教えを聞いていく仲間、「同朋」として見出しているかと、自分自身の在り方を顧みてみますと、住職である私は、本當の意味でご門徒の言葉に耳を傾けようとしてこなかった、ご門徒一人ひとりを信頼していなかったということだと思います。

以前、お寺の会議で、総代さんから「おれが物言ったって、住職のしたいようにするんだろ」と言われたことがあります。もちろん、住職として、リーダーシップをとるといふ意識もありますが、ご門徒さんの声に耳を傾けて、ご門徒さんと一緒にお寺を運営していこうという意識が希薄だったということがあるのかもしれない。そういう問題の根っこには、「ご門徒さんを信頼していない」「自分が一番お寺のことを考えている」というところに立って住職をしているということがあつたのでは。

この御遠忌部会での語り合いを通して、私自身、ご門徒に対しても、地域社会に対しても、閉じた在り方をしてきたというこ



とを考えさせられました。ご門徒や、地域社会に対して閉じているということは、「念仏の信心」はあるけれど、ご門徒や、地域社会に開かれていなかった」ということではなく、「ご門徒や地域社会に対して閉じていくような心は、念仏の信心」ではなかった」ということなのでしょう。

九谷先生は、講義の中で、繰り返し「お寺に身を置く」とは、「教え」と「世間」の狭間に身を据え続けていくことであり、巡り会う人との交わりの中で「あなたはどの世をどのような精神で生きようとするのか」ということを、聞き開いていくことだ。念仏の信心をたまわるとは、教えと世間の狭間に身を据えて、教法にたずねていくと同時に、ご門徒さんや、地域の人々との交わりの中で、自分自身の在り方が問われ、自分の狭さが開かれていくことであると、ご教示して下さいました。具体的には、自分の教化の現場に、ご門徒や、地域社会の中に、私のことを親身になって叱ってくれる友だちや先輩がいるか、ということが問われるということなのでしょう。

お寺が地域社会から必要とされ、人々が集う場となったとしても、寺に身を置く私一人に念仏の信心がなければ、ご門徒さんや、地域の人々との交わりの中で、自分自身の在り方が問われ、自分の狭さが開かれていくことがなければ、真の仏道ではない。人々の交わりの中に身を置き、交わりの

中のざわめく声を聞いていける。そして、交わりの中に立ち上がっていく。それが念仏者である。

そのことを二年半の歩みの中で確認させていただきました。